原と云處からも出る、右三ヶ處の内大瀧より出る鳥よろし、

日光駒鳥

右の處よりも出る、尤高下なし、何れも春秋は荒鳥、夏は子駒出る、但し荒鳥飼込にても、さかりつよき時は、尾をかぶり手につくもの也、子駒には尤かぎらず、さかりぬけ候へば、元の飼込となる也、子駒は玄じうおたゝき也、勿論泊木にて、尾をひろげあげざるを海老尾と云、尤右鳥は長尺三ツ頭ひしぎ啼は、何れの鳥にても宜しきと云、長尺なるを上とす、飼方人々知る處也、但し春おそく出る鳥はかねつけとて、至て弱きもの也、此事心得て飼べし、但シ悪しく相見へ候時は、蚓用候へば早速よろし、

〔食物和歌本草五〕駒鳥

駒鳥は冷なり淋病痰に吉しはぶきをやめこゑいだすなり　駒鳥は虚勞久しくいへず骨蒸となりて熱氣のさめつひきつに

〔大館常興日記〕天文十一年閏三月廿一日、駒鳥高信かたより獻之、

〔風俗文選三譜〕百鳥譜　支考

木々の花の咲こぼれて、明ぼのゝ雪にもまがへる時は、駒鳥の聲のみひやゝかにしていとよし、されば此鳥の名は聲のたぐひをいへるならん、

〔和爾雅六禽鳥〕繡眼兒出于常熟縣志

〔饅頭屋本節用集女生類〕目白

〔物類稱呼二動物〕繡眼兒めじろ　薩摩にて花吸と云、上總にてをかまの鳥と云、

〔本朝食鑑六林禽〕目白鳥訓如字

集解、狀大於鷦鷯而林鳥中之最小者也、眼眶有白圈、頭背綠色、臆腰黃、翅尾黑腹白、性能成群集于枝上、相依互推、啼而喧喧、其中一隻飛出拔群、則餘又相推、又自中拔去而如初、終爲兩雙皆飛盡、復群集

目白